
人魚の子——メアリ・スチュアート処刑秘話

中び連会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚の子——メアリ・スチュアート処刑秘話

【Nコード】

N 8 6 7 9 J

【作者名】

中び連会長

【あらすじ】

一五八七年二月、冬枯れのイングランド。旧教徒の企てたエリザベス女王暗殺計画「バビントン陰謀事件」に関与し、大逆罪で斬首刑を宣告された前スコットランド女王メアリ・スチュアート。刑が執行される数日前の夜遅く、フォザリングей城に幽閉されている彼女の元をある人物が密かに訪れる。それは、メアリの一粒種の息子で現スコットランド王ジェームズ六世だった。王権を奪われた母と奪った子——数奇な運命を辿った二人の対話を通じて、血塗られたスコットランド史を描きます。

セント・ジャイルズ広場

陰鬱な雲がロンドンの空に低く垂れ込めたその日は、処刑日和だった。

テムズ川の緩やかな流れのほとり——周囲を睥睨するかの如くそびえ立つロンドン塔から引き出され、久方ぶりにか弱いながらも太陽の光をまともに浴びた十二名の罪人は、垢と血膿で黒ずんだ肌着一枚のまま後ろ手に縛られ、粗末な荷馬車に乘せられた。そして、沿道に詰めかけた群衆の、

——汚らわしい反逆者、女王ベスの敵、ローマ教会とスペインの犬——。

割れるような罵声を全身に浴びながら、終焉の場所となるセント・ジャイルズ広場まで引き回されていく。

広場の中央には処刑台が設けられ、黒ずくめの衣装の処刑人たちが苦痛に満ちた死に導く諸々の道具を準備万端調べて、アンソニー・ババントン卿を始めとする罪人たちを出迎えた。

役人が進み出て判決文を読み上げる。

「——この、おぞましく薄汚い反逆者どもは不逞にもエリザベス女王陛下の暗殺を企て、王国を外国に売り渡そうとした。よってイングラント王国はこの大逆の罪人に対し、神と女王陛下の名の下に正義を執行するものである」

「違うつ、私は汚らわしい罪人などではない！」

渾身の力を振り絞った悲痛な声上がり、広場の全ての視線が一人の人物に集まった。女王暗殺未遂事件の主犯として断罪されたババントンである。

歳は二十代半ば。在りし日は裕福な若き領主として宮廷にも頻繁

に出入りして華を添えていたが、今は——ロンドン塔の中で拷問の達人トックリフがあらん限りの技術を駆使し、彼の肉体をキャンバス代わりに描き上げた数々の華麗極まりない仕事のためか、貧民窟の物乞いにも劣る哀れな姿でしかない。

「私は愛国者だ。王国に正統なる王権と、カトリックの真なる信仰を復活させんとして——」

「——薄汚い口を開くな、この反逆者め！」

群衆の一人が叫ぶと、他の人々もそれに唱和して再び「反逆者」の罵声が広場を埋め尽くした。衛兵が処刑台の周りにバリケードを張っていなければ、興奮した群衆は罪人たちの元に殺到してなぶり殺しにしていただろう。

そして、愉^{たの}しい見世物が始まった。

処刑人は台に仰向けに縛り付けたバビントンたちの腹を切り裂くと、腸を木の棒でぐるぐる回して糸を巻く要領で巻き取ったり、他の内臓を乱暴にちぎっては火にくべたりする。次に陰部をえぐられ、罪人は想像を絶する苦痛に泣きわめくがまだ死へは至らず、絞首台に肉屋の軒先の豚のように血まみれに吊るされることでようやく安息が得られるのである。

自分の内臓が焼ける臭気に血の気の失せた顔を激しく歪ませながら、バビントンは青紫色になった唇を魚のようにパクパク動かして、《主イエス、私を憐れんで下さい》

と、ラテン語で繰り返し呟いていた。

スペインの駐仏大使と通謀してエリザベスを暗殺、代わりに旧教徒の《従妹》をイングランドの王位に就けようと計画したアンソニー・バビントン卿は、群衆の残忍な歓喜の叫びを讚美歌代わりに聞きながら、その悲惨な生涯にピリオドを打ったのだった。

「反逆者の死に——」

セント・ジャイルズ広場に面した居酒屋タバーンの二階で、残酷な処刑の様子を眉一つ動かさずに眺めていた国務大臣フランシス・ウォルシンガム卿は、低い声でそう言って手にした杯を軽く持ち上げた。

「……しかし、よろしいのでしょうかフランシス卿」

テーブルの向かいで、気味悪そうな顔で窓の外から目を逸らしていた猫背の若い男が疑問を呈する。

「よろしい、とは？」

ウォルシンガムはオウム返しにその小柄な男——王国の最高行政機関・枢密院を主宰する大蔵卿バーリー男爵ウィリアム・セシルの次男で、若くして秀才と誉れ高いロバートに射るような鋭い視線を向けた。

「いえ閣下、かような残虐な刑罰は却って逆効果ではないかと思ひまして」

「なあと、ロンドン市民は熊いじめより興奮するショーが無料で観られるとしか思わんさ。まあ枢密院で君と同じことを具申する議員もいたが、あれは女王陛下の御意向だよ。奴らのはらわたをえぐり出し八つ裂きにして高く吊るせ——とな」

ウォルシンガムは杯の中のシェリー酒をあおった。

「あの陛下が、ですか？」

ロバートは意外そうな顔をした。

「無理もなかるう。陛下はこれまで何度も旧教徒どもにお命を狙われながらも、奴らの信仰に対して《心の中まで強制は出来ません》と、極めて寛大な姿勢で臨んでこられた。それが今回の事件で見事に裏切られたのだから。まあ、私は以前から旧教徒どもは徹底的に取り締まるべきだと御進言申し上げてはいたがね。」

ロバート、これから陛下にお仕えするなら心しておきたまえ。陛下は古代ローマの神ヤヌスのように二つの顔をお持ちなのだ——慈愛の女神としての顔と復讐の女神としての顔をな」

「はあ」

ロバートは曖昧に頷いた。夕食の席で父セシルが女王の気まぐれ

さをよく愚痴りはするが、彼はまだ女王と近しく接するほどの役職に就いてないので、女王の人となりについて具体的な話をされても雲をつかむような体だった。

「それにしても今回の件は誠にお見事でした、これでようやく《身内の蛇》の頭の中に潜んでいた邪悪な陰謀が、女王陛下暗殺を指示する暗号文という確たる証拠として露呈されたのですからな」

「あの《蛇》は我々枢密院の悩みの種だったが、それもじきに終わる——ただ、しばらく陛下の御不興を蒙るのを覚悟せねばならぬがな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679j/>

人魚の子——メアリ・スチュアート処刑秘話

2010年10月10日21時47分発行